

巻頭言

今年度の「第7回 CISMOR ユダヤ学会議」は、例年より早く2013年6月に開催された。例年と同様、今回も数名の著名な学者と新進気鋭の研究者を国内と海外から同志社大学に招聘し、研究者や学生、また一般の方々に対し、それぞれ研究の成果を発表して頂いた。

今年度の会議の焦点は、キリスト教とイスラーム環境や思想との関係における、中世ユダヤの創造力についてであった。これは、古代と中世初期のユダヤ教とキリスト教に焦点を置いた2011年開催の第5回ユダヤ学会議に続き、年代順の観点からの第二段階と考え得るであろう。結果的に我々は、三つのアブラハムの宗教の一つだけに注目するのではなく、特にそれぞれの著作をとおして表現された相互作用という、他の二つの宗教との関係にも注目し、CISMOR の会議の伝統をも継承したのである。

会議一日目の公開講演会とワークショップは、中世ヨーロッパのユダヤ人とキリスト教徒の間にある複雑な関係を参加者に紹介したものである。二日目もまた公開講演会とワークショップが持たれたが、この日は中世ユダヤ教の最大の賢者であるモーセス・マイモニデスと、彼のイスラームの科学と哲学との実り多い関係に注目した。

中世ユダヤ教とそのキリスト教とイスラームとの交流というテーマは、同志社大学神学研究科と CISMOR が、マルク・サパーステイン教授とダニエル・デイビス博士が勤めるレオ・ベック・カレッジと、ワレン・ゼエブ・ハーヴィー教授が勤めるエルサレム・ヘブライ大学と結んだ協力関係の枠組みにおいて、CISMOR の若手研究者のためのプロジェクトが支援したものである。本枠組の中で、2012年から2013年にかけてエルサレムでの二つのシンポジウムとロンドンでの共同ワークショップが開催され、それら学術会議で発表されたすべての論文は、今年度中に CISMOR から出版される予定である。会議二日目のテーマとなったマイモニデスは、二日目のプログラム策定に尽力した若手研究者の一人である、神田愛子氏の研究課題の一環として選ばれたものである。

例年とは異なり、今年度の会議はすべて英語で行われ、日本語による論文やコメントの発表はなかった。このため、会議でのすべての論文と主要なやり取りは、それぞれの著者によって出版用に編集された後、ここに英文で報告されることになった。

我々は会議の運営と本報告書の作成を助けて下さったすべての方々に感謝の意を表したい。特に、CISMOR 事務局の池田登貴子氏と川面なほ氏のいつもながらの熱心な支援に感謝したい。

今後も、ユダヤ学における毎年度の CISMOR 会議の伝統が継続するように願って止まない。

編集者 アダ・タガー・コヘン、勝又 悦子、ドロン・B・コヘン
2013年10月、京都にて